春宵風見禮

初作

へ13
3014
1

へ13
3014
1

七十六号

へ13
3014
1
3014
1-3

紋
恋を奏帝は乾度し男女の恋を
人情は大変の第代の宝あるを唯是
水晶は屈ぐり昨日は今日は法り
形を。蓋者必奏會者定離と知
暁即蓋提用の人は人参
人は殺は理り死を市和が年年

光りの馬に白樂天の詩を得て
樂天の文人拾古代源氏の事を
取扱て序せよとのいとゝ美情
水源を尋ね流れを操をけがさぬ
僅言葉を一芳手異社表ひとり白
紀氏を源氏好みの新しく英
雄の異事を書べし英雄時社

夕奥を分きしかの
元よりの作者を外人の拾合
社梅の香を那るまし世の角社吟と
古詩机に筆取て拙作の事を
社岡塚のとをの
思川社流れ
硯水清て

雲亭春信画

持金屋の

持金屋の食客与五郎
娘於古世

花小路の娘於園

植木屋杢兵衛娘於鳥多
根樹坂岩六

春雨新話風見草初編巻之上

東都　梅亭金鶩編次

第壹回

雪深き佐野の渡りも遠ざかる足利学校偲び偽す
町八十野の桑の西端の辺に本條紬の名物さつまり縮緬
紬を織出す——是徒の者の多分なる古地いとも絹たる
中不祥金龍寺石碑と云ふあり家冢栄元慶らの
墓の側の古蔵八棟を列ねて立つべき奥ふかい蔵の

爰に備中庭の泉多樂山まで長一方格へ茶湯
華洛不のをさく劣らじ然不久須より饒食模濱所も
縁者多の金沢屋右衛門の次男右衛門と云る者年八
二十に只一つ孤にて門閥多性質不乱群の庵ひと保書と
長く長爰不暮り人を多多幼雅より人面を多く長赤を
学び多とよく書籍に多多と好きけ長最風流不藤へと
る離是庭爰を書秋と做一人閑雅を楽しく長籠り居
物の徒然多八之味線あ長須ア琴みと鳴し人弊と敷め

多多此処ら此辺八徒昔より武蔵専ら流行做一多き
人々歩多り人剣術柔術あ長赤弓鉄炮不嘗りを敷ひ
慶野不出て長鞍を乗る馬を立一拍ぶとり人月行月行の
楽しく長做一多敷右帝由五ら長是等の術
を学び多不元より器用のもと多長忽地上達多
より長須八弥生の末多り已ア今月八新より山この雲を
深く歩掩ひて隙両不候残る様由早晩敷方多
柔勝る庵の周の地の彼方の不山田不明と得多りと巨と

笛鳴樋の爰さ人目の忍人角角淋しさ弥増して夜の帳も空
然と机ふりかたと表情さ忍業ふ流むその打ちう扉ト不
人の影在して「音倣で此在いまず上と長々陳ふ引明て徐と
立入る八代家の娘ふ古世と人ふ老敢りの年八拾七十七
の天も香もなう秋風俗さ人ひどけふさ多ふ山吹の花は
形枝を持ちうしが夜ふ帯の影と長眠さ渦鬼と物ふ
ら「まさか乳群多武の宮此在いまず久ト毛と此方ハ蔓
尓と笑ひふぐ〜おー居走り「ふ不去程でも長々主と本ち

獲俵るー〜毛ふハ墨と物のが面倒さこの人間で長生ふと
人居さとろうサ弁して夜おおえんか一人久「唯長今此花と乳ふ
アの家の庭へ咲さと生ひて実ひまうが降り長安山発い
まず〜〜か月ふ撫ふ糸りまさ「丈ハ経ふイヤ太程の
山吹ど早迷さして楽〜〜せうト此辺ふ人毛ー「別変い
昨日桐生川の水で烹花と掬へて入せうと思ふて長松ふ
傍ふ吸で黄さ残りりのが疲の方の渦の瓶ふ毛やすう
飯ふ毛中へ突んで毛やせうト主ん主と生ると入るようも

「ア」右仮が入まて来りまする
云さして流へ口開 莞爾と笑顔不眼元と赤らめ
赤の猫なる為へ破山吹の打枝をのく「彼枝」
宜敷のて仕度いまする「孫不孫」
咲さらく様りまへさ孫人自然の枝振の方が結句面白
が為指ぐと皆時弥めて在るが「水三山吹の仕返」
と宜口長久のお意花でも称へて上ませうトまと長伸て来
簞笥あけ清為焼の混燈を出熟海細工の長丸く仕

久良の切屑と次大弁の大を移して自分が自習不
書為く扇を半紙間さうけ扇ぐなが「庚が散」
仕免なさいヨ「お湯為く沸さのが仕度いまする一寸拵
来りませう開して お柔も仕ホも「お様ひまう」
せんが二尖へ自分が吹て人吸サ開して湯も彼指をくさ
きつて沸するが楽くこのぐらくかあさんハまア落付人
大弁の側へお寄人なさいよう何指して両が除くまと
為りく来いくを伝若でも為て人指て仕度人やす

でもおあさんがおゝ働らせまうして居つて居つたへ
まアサ位ゝ一服お吸んなさいト云さまうが肝心の腰附を
上移人おやア帰まう移人ト腰のまわりを探つて煙管と煙
附壺を云いなゝ　お古せがあるかもしれぬ　毎　ハイ紙屑籠の中
丈でもまあ君がお湯をお沸させまうして一服戴きませうと
移人　今花を彼処へ置てお貰ひまうしさ様おあさんに紙お
まうとこうけて張つてお仕舞ゝなゝ紙がまうの手洗と云て吸し
お異る移人　丈でも此花を彼処へまうとこう此方へ置とく

ちつけてゝなゝまあいでおるゝなゝ　あのいでおるゝなゝ　ハ
おあさんいおちものお嬢さんこゝへいらつしやるのおまうがお嬢さんをあつ
ひまうして洗りんでなゝ　ぜんやせうトいふおもてよ　いちまもり　毎　アレ
まう場らんそんな者アなゝ　紙おまうとまうして
のでなゝいます　ハテ者アなゝ　紙おまうとおものでの紙
おまうの後ぶいなゝ　紙ちおくしいおちつくのでなゝ
せう　アレのつさいあのいそんなんなとと居人位るゝよてゝきとめゝ
いいなゝまうせん　丈でも紙おまうの張ハ紙とつゝくのなゝ

文人弟

ふじ上

おつう 他人行儀になさるさと ちつとさうと思つてゐるのでござりますヨ
あなたさんのお亭主が出家にならしやめてとりもちして看病けれどもどうぞ「お
まへさんはさぞしおかりさんのお兄さんのおこつてゐらしんおまへさんのお
とつさんの妹のことでありますどうして他人行儀ができるものでござりますござ
しておりつたるひとこそのヲとひへどおこよいらく へおくあんは
おいてごまつて おみ世へ上がらうのおてよがうかとさ「のぞき「て 他人行儀
ずんおひなとで きつくまおみけ しかづれちやア へてへでぐひうおおうくきため
て「ヱおこよさん此方の事 だれに申しれ やアーまひ子どうしても

彼様なお子があると いはん安さへにならぬ見ず知らずの他嫁や今の世の男の
不料簡な子があるとなりと出来るのさと言て取り返すと実家へ
心を実の親の様さへあれば 殿下まで 当世の茶を上 喜世「
イヱ親を見の付た様なものは此節へ来たがお当世は約束さぬ花嫁と
見て異様だと言て聞く気に入らぬと 客「なおさん一人で来て大延
に嫁くが在ても宜らうか 喜世「継母アきさんが今の様な用を言付て念
うちお子おさんに此花んだおいて様へ上ろとまうしましたのでおう
ひとつ遣くれても宜ゆうございます よみ「支もう心安心な様 親方出度の

やうあつて人をのがれ世を遁れ隠れ住むとも運命は
すなはちこれ人力に及ばぬ所の死なり誰も知つて居る古国の
諺世ごろの人が軍に出て討死をするのを縁の死身と思ひ
かうの時さぞ命のそこなはれん人縁の死身と思ひ
あきらめ出でたる上は命の限りあるべしと云ふ縁であるべし
しかるに死ぬべき時に長生きをする人あり
けしからぬ仏の瀬生に長らへ一度の死縁なれば沢死縁なれば
でも哀しかるべしと云ふ縁で思ひ知つて居るべし 死ぬべきこと
のみ命ぶべきことも思ひ縁人と云ふべきなり
死なずして生きある人
会者定離
あの離別するこの人教えを思ふと何時何時も用ひ加
らるべきの相あれこそ居るべし 知つて居ながら
来りのサと云ふ古世いの事が新しきを思つて 用心
初る大義と戻へ実に「不立立」を相手にて近く
うとうとあれでもモウク離別云ふ縁一生先 何瀬 老君の
のの初めて知つて居ながら 知つて居ながら

丈　丈屋敷が始まりと云つて「お吉さん」
何のごとりと迎て住どらうのの香りのごとくこれ
ど実不宜と思つて居るのごとく丈と恥ッ臭ひ不疑ぐられ
さと是程のんが世い釈りさうなあざと悔ア後悔て来ら子子
ごうりうく手指ッ多を煙不出云て方異でなのョョョ。と
云へたか古世い義侠さ「丈でも君い毎日く鎖倉の多
ちりう云て方在ッ後ッ逃ッ武地ッ長くッ在ッ悪い仕舞
と思へと孤不寂く後て来て死でも仕舞この指で出合い

手手「何指ッて」く大遠ひ鎖倉の多を思ッ仕ッら武方
らの厄介ッ不後ッ居ッ居ッ人丈ごうう見非家へ帰ッ居
ッ云て来ッう何指ッ手ッうトト丈ッ「ッ業ッ」で居ッのサ
と云ッ脱ッ指ッて歩ッ姿ッる云ッ命ッ古世ッ物と酒屋
ッる打ッう滞と章ッ立湯ッ不強瓶の蓋ッチリく

第二回

知ッ弟い陀八焼の小ッ瓶ッう南京の釣瓶茶碗八鉢ッ
て方古世ッ如「サッく」お茶ッ遠入やしと綾い出物ッ不濃で

召上がるとの人と仰せ申しかゝ婆アさんのお客でもう帰りんぞ拍
ぶ能い仰拍でもようとして見を一口給てはゝ婆アさん孫兵の
木湯ホ居ル所ホ人客僧の半男屋の貸本屋が慌
ゝ来るあホ屋けてよとしゝとのでは殺人やまゝ今ホ
意外さんの方へ拍て上らうとこ男のて居サと面淳孔の
菓子を四へ入れ木繁しゝと煙草羊羹を切ていざ世老「最ホ
捨ておいて作さのよう「支でもお古世さんホ沢山拍支を
あて見入大分ホ居ろと云付ら立ち易ヲ「ヨヤく雅が手拍

合ろとまゝ支「夕ア出雲の紙さ多ク義拍ホ立てサ
支ての拍支を居ろとを仰と「のでは殺人の手ホ
命令で結ぶと結んぶ仰拍ホ多ホ居ろぶ食ろ
止て仕舞が宜と仰とのでは殺人の手ホ
部拍ホ殺人「才ホ支でもお物ぶ下ろけて「去来ホ意
義を武ろ宜ホ居ホ不ホ殺ろ下茶殺を採ホ殺ホ命が「支でも
仰ぶ井ホ殺ア殺ら多い殺人「塞の殺居ろうホ在ホ
ホ居でく不義のぶらうと見ひ手ホ殺サ「塞ぶくホ

ごけ丑ど紙ホのう気の時ゆうぶ無ものヲ一丈ごろ〳〵宮飯が
悪いのごと書うすのでは食のはすよヲト義傍けた与入爺も
皆時云鐘い無ろ〳〵が「間が悪ところお嫌〳〵書うと
と思つて居ぐが知つてお在の通り張金かう降参くと変く
多紙を上と書すのハ兄さん長三爺さい釈父さん為実ホ
のあごけ丑ど先の義母アさんの義んごので宮飯の義母
さん来ハ絶ぶごろ〳〵程く大多ホ高なけ見ば不成の上伯柏
いふものう免角程チホ多飯の中宮飯ホ後と繰せふと

ろ人のごろうと推量ろ〳〵達者な体と病気と云云
保書が高〳〵と氏名へ来て被相してお世話ホ成て居の
中宮飯が家ホ居のハ義母アさん中悪いんハ知まい
うと思つ〳〵ホ矢張釈父さんを御実て見さんと居ハ柏
ホ云りんご〳〵釈父さんも考気ホ成り無理ホ云や
板主を見さんハ相中変ら伝邪人ホさまる義母アさん
や釈父さんホ優義して能者伝と多成さけ丑ど義
母さんの我が折伝悪い線中と云うりんご〳〵連中自

分が長くて治まらぬと思ひつゝ段々家出して才木家
を継せようとの人が仲人となって何時や〻家を出さう
さう今日の方が昼間お母さんが昼間お母さんが
出たことを聞かずに早く繰倉へ帰って来いと云ふこの
一昨日の晩に叔父さんが横浜町々自己の方へ
来てお母さんを帰して呉ろと云て来さう早く帰つて
貰ふお母さんや叔母さんが仕方なしに
叔父や義母さんが仕方なしに
ど彼地へ行た兄さんの居ないと憐憫家の親戚と相

続せる義母さんのお考へ何れも繰倉へ行きて
分れ居ッ兄さんが放蕩ざかり病身で人世の世作が
出来ないから仕方なしに弟へ名儀を譲
て自分は家出人外出義理のある中を何れも家
督が続き世ッ支ぶ兄さんの居所が知れて家の跡
目を譲ッて貰ッて仮令放蕩で居ッて遊び繰倉
へ帰らぬ身の上云へば世間も無あるとおあさんが優
柔可愛ッて叔父さんや叔母さんのお尾

と云て走て行つて由被拾て居たと思ひ人々まと思ひ意外ファさん
少近ひ不来て前へ縄と付て由猟舎人連て帰るとの事
少孫兵衛ゴ者敬由見えんの拾不身でも猟さなけ
ら云の伏右初まつて拾みず不成うと思つて居
さ放棄ることも無為ッペ者をおあさんが優義し
お長ぐ〳〵嫌しくん人の門で飛五銭不思つて居
ぐ悟らぬ表で過しこの由猟舎へ帰らまし代方
不由居まの日の末由遠の温奏不おあさんへ
昔男とみ自分由結句思の稚と歯を食ひつて居
幸抱日日不協ぐぐ暮つて来て人不倦たま剣術や業
ら術の誓古不出て居て由早く仕舞て帰るのを楽し
不為る心つつ下絶の解てまさ若男不若男のまみ
毎日〳〵人初まで鳴泉ぐり鳴て居るのサ丈ぐ〳〵今
由おあさんへ云ぐり舎者定離ハ遁まま浪世の行
離まる拾不成う由初まのけまど依令丈帰不成
さと云て人の命ハ霧アぐまで行方が死んで由離

遠の早い方迎のうす。エお吉世さん何相を張てもいと怒不喜
人脇面へ行ふ乳ハ世もあのいが為方一のうがあつさう春
のタアのを祇ハ紙ハ紙い夢をうさと思ひ人不和ふ見ぬ神と
モ憍慢生ありなりの縁ハ小して出ぬ名んでお異で無と
吹てお吉世ハ偏教ぬ涙を嘆ハ春こんで「本稽古君の
作ありお見イさんと長毛てお家のお名跡をお後
ハ出来ます事いが仮令教母さんがお近ひハ
お出ぬさうて何ようヤして張金人お帰人長あの相ハ

できさうなあの生ともハもさうらいませんあ〜是
てまさんでハ邪テうあうませうがどとへありとい一ハ不お
連ぬてうごさいます。さんぬんでもうさしいおてバをうまる
のハ度でゆうざいます。居ぬきうる位命うあよてうさうお居い
しまて ねるあのさのおことをもりむさいよおうさひまりしの
いて出ません是半ういきうてけるのとお呵りうんてもあいと
いどうも出ぬ世ませんト張ハてバもロ張て泪ふりのうえうえ
ハバ寄めうハ吐息吻おこよどでバへをよのせて一万一どこう

おてよ
雑書
よ又作

ろ
仕ぐるも仕舞おとぐるこゝとらんのでさらとさうまる状で
も無おかまくさんの中うおるまちやアとゐうモウくどんな王が
あ
ゐてもこゝをろくしいゐうゐいうゝ表んしてかゐれてしてそんな
うゐとしてあるおくされうくるといけるのいうゝきぐんをかまー
ろ
さぐんをかまーと云ゝうサアようサアとひざの布を揺ゝゐぐゝ
「つゝこゝろ洞をゐいて上ゝうとんの時へひまけ見ば「アレうゝ」が
子ゝ「それぢやアさぐんをかるゐんーか「ハイ「イヤモツとんざと」をひ
ぐゝろけ「どこへもかいそゝゐのでゐ時まアでもゝゐおて

下ゝ「ヨヨ「ハイく畏りまー」と「芸ぐで四角いまチ入「俳
厳敷おぼーぐど「支でも紙ゐ乳ゐ成てゝ云ゝ蛍ゐ色
笑人新をゝるゝゐ布ゐ帯ゐ「ヤレく見て踊付ゝ候ゝ眼
縁ゐ可笑く成て乗ゝうゝ誰ゐ来ゝと仕ゐのいぜ「人ゐ人
て物相ゐゝと云ゝ考ゐ君ゐ逆せゝまてゝのゐと云ゝ宜
四角へゝ子「大遣ゝゐくお成ゐ踊ゝアくゝ手乳でゝ
一ワゝと云瓶へゝうゐゝと云ゝを歯て「ホイ「酒ゐ桑ゐして仕舞ゝと
云時廊下ゝ不行女の夢ゐ「ゝ云ゝ弟

さる君のお美義お敷を一寸拝又人不上りきしと云べ後
ゝ赤一人「ホ」三君様が仙鶴遊さるのお使ひ不上りきせう
と只人と仰て目一面ホ鶴と申しして第つさのでゆ雅へきョ
と奔茶で塗さ琉球の丸盆へ福田川焼の中用を乗ス
蓋を掛さまゝ奥処へ美物「あの川で採さ新を稀不
絞しておりくのお新りを掛へきゝゝ美味くへゆ雅へ
きせんが為宜敷を澤山お盛りと拵て石上りきし
と言伴きさ「そのゝ通ア紙でお使ひ掛別しと美味さ

ざらゝ 侍女「お古世さる只今君のゆ氏方ら人持てトリ
きす 「君様へお茶蓋を載いさゝ 侍女「丈でゆ仙鶴遊
さるが古世のゆ持て上まさと言伴きさ 「丈ぢゆアお茶
を入度さゝゝ 侍女「ホ」三お帝さる君のお接義さゝ出
来きしさコ 「フムウ そのゝアお味噌しゝ竹柏の人ゆが
拾きゝさのさ 侍女「只今鶴金ゝゝお長紙が届さきしお迎
ひ君の君様アさるが君をお迎ひ不お越遊ばときう
すゝべ仙鶴へきすゝお久しぶりで彼地らのお別深のお

[illegible]

ト。唯てお古世へたのと牛り長ぶ[illegible]初ゝ代孫をまゝ「そり[illegible]

お[illegible]美ゝ久「八十兵今[illegible]形さ[illegible]ゞ紙をお[illegible]

お側ゝ何つて居ゝさ「いのやモ滅法嬉しい嬉ゞお新も

嗣へ通ら移人トを抜て投肩すゝ初ゝ雨ゝそゞ濡

て[illegible]の猫が[illegible]へつと弦ゝ[illegible]を揮へた

陸へ[illegible]ゞパラ〳〵

風見草初編上終

春宵新話風見草初編巻之中

東都

梅亭金鶯編次

第三回

[illegible]ゝいざ[illegible]同ん都[illegible]と在五の君ゞ[illegible]

田河原ゝ紙迫を番場の里と[illegible]ゝ柳村の[illegible]

一人来ゝる[illegible]が紺の[illegible]ゝ麻雲草[illegible]合羽の

上ゝ菅笠を脊負て白地の[illegible]を二つゝ[illegible]

宮ゝ[illegible]世春さ煙草の吸殻を[illegible]ポンく掛さ[illegible]

野面を走り抜けて後ろを向かふ見るのが癪にさわるので
繁つてゐる宿屋の森とやうやう而見えだした方角の家地
の松とやうやうに何かしても風い無空い繁盛とも見
えるやうに拵山の絵で被拵人累色をえんやう嫌伸とも為
つぐらうが少し斗りの西縁を間遠に藤色あちらア
拵ゑれヲヤ何ぐ国の中ト大分美しい女がつれてゐるが
へエ情夫を成程在ると思ひ西い絵金の賢人繁華ぐ
と国で居ぐ代拵が行田舎ぶ世人立流行女中達が出て

勝草ぐ拵菜ぐ取て居ぐ行ぐ町中へ出ぐ
嫌悪りなりめぐらう何ぶ為ても美麗のが難ぶて居ぐ
と驚時被方を見やうが吻と涌息吻ぐ代拵
ア女をしるぶ付居代ぶ知ぶ世さん見利の拵金屋
を被出ぐ今日で民日為右源西ぐ云吹ぐ
て居ぐとけ且ど何の拵でも被拵でも離るのが居ぐ
後で居ぐ嫌今頃い繁ぶ
ぐらう代拵ぶ成うと思ぐ之被仮令死奴絵拵

こうてを掛いて仕舞と拳拳さの不安張我慢が出来合こうて
一面ふ藤とのぶ所の張り嗚呼アは手を捕つて仕方も
方ふの品人の様ぶ作日あこう逃つと見科の方の
山ゆうたそこうこう壁とア頼とゆふけれど今月は実を形の
ぶ見とこの人も意外アさんが男屋の引側しふ若く後強縛を
す為さんぶこう祝の周囲がふふ振つて行拍やこう被拍やこう
仕方が兵宿被拍為位ふこうそこの齎主お吉世さんと連
物ゆ一面ふ逃こぶ場ぶこうイやく直拍ちゆア敏さん

や敏さんふ若旦を掛こうこうとこうゆ激ぶとこう云ふ見
さんへの義理ぶ敏物こうと思つて呉りやア見が見後ふ
ぶゆ物て為るのふ屋ぶこうこう逃こう行のと思ふ見ちゆア理
ら後人嘩こうぶが正こう屋と思つて為るのふ通ぶ後人ふい
あこうこうふふぶト意ふい見ふ藤の手を拝こう二人居業ふ
物先の石へ風突向ふへ後僧「ア痛こうこうこうこう後人
石ぶふアと敏を撒めて立こうこう物ふ物の間の間に
踏為こうこう女が支上り「サアく金さん お懐こう及ぶ お出拍

ちらちらと咲いてゐる処からの暇道より立上りしるお梅おお
竹お松い大きな声で「金さん比べつこ致い此指の大
道橋もちと影お入まてる。何やらをこんせりはべる竹中顔
お気で「拙業えんや敷草　ぽんぽん草の二上りやらく
の意味をもてりなさの去筆を壁に上羽人さいまりと同
く筆を差出せばお梅が側ちらちらと「アサヤもどろうぞ
あいお嬢さまが彼地のたう人お歩み拙ぢちるる早くおいでと
暗闇を指ゆるるるく二人の女が辿りて北へ出る約十七八丈

ほ追追「モウお帰り拙ぢすのでお暇います」「帰り遅
て何らるるといけるのるる拙ぢませうヨ　竹「モシお嬢さまへ寝ひ
乃で凸凹ることお行きるるお隙雲に隠れる。此時先
歩行拙二人の者お樹一女いまる処お立止り「ヲヤく不
繁気お濃ぢやア移人お何処まで拙ても橋が無るる向
ふの彼来人お知らぬやア者のハト後振向て小徑を屈め「
モシお嬢さまへ先稲い何処ぐる濃つて来りまるる氏先
ふい橋の掛つて居ることろいりませんるる何処まで来州

てを向ふの堤来ハいなら是まで共「ヲヤ〳〵それぢやアいけるのい
ぬ人ゴウが指指ガ云フ〳〵向へハ行ケるのいとき ト呼てお梅い
の伸上り彼方此方をおそるやう「アヽ恐ろしい稿ハて在さ板
ガ向ふの堤来ハ投り出やしてあるよ誰ウ此小溝を二寸と乗
で飛板を此方へハ渡し合「家程さ云ぢやア在さへし何指
あて向之乗ふるあの子「向ふ〳〵人ガ来さうぞ彼余頼
んで渡して貰ふぢやアないか「ホニ是ガ宜ヲヲく大迷惑癪
な人ごゝロお梅さんかあそこ処〳〵頼んでお呉な「おあぶ声

とおそれる後人「否アなぬる〳〵揃いなのがあんなつく男
ちやアるがるいあヲ「ホニ小云乳な人ゴ後人ト行縁とこ
ろ人来かる之人命先ハ云ふ女ゴ云ウけ「モシく姉ハ頼
ゴあるちるとくと呼止ル事ことハ振向て「ハイ何御用
お呼なすつてこのでこ世人やすう「ハイ何とも御りぶそてハ
投つてある板をこちらへちよのとこてお呉なト呼て女人命ハ
辺さろ〳〵「此板を指ハ渡すのでゴぜへやすうドレくお行な
世人やーと板を引抜ハ小見さうけ押てこて

サアく　お後んに茶是ちやア上へのつて踊りをおどつても大丈
夫で御座へやすト云バ此方の手の女が「彼ハ足の跡のあしぶ
迚もの所では宿銭が一寸おうちとふくちの道へ後つて付ら
そこ処から其のとほ手を伸して宿銭の手先を出さしておくれ下ださ
足搐へ踏かけて手先を其のと伸す枚女郎へ否とも
いえれバどうぶの縁から是も手を伸　女の手先を繋り捕
へて「サア徐々とお後ん茶オウトどつこいさつさ　女「ヤレく是で
のうく乞くサア　お擬さまおうこり拵だせこつい　まアござりません

モサおお逃て継ずとお擬さまをお後しなすつておくれ丈
上サ逃るんぢやア御座へやせんがおあさんが此方へお後ん茶
宿ハ置と見てモサ　女「夫でも男気で云ッちやア雲やアね
と云ふと亭主は女郎の小溝の縁から手を伸し「サアおお
さん宿銭の手を握りと探つて見て此方へお後ん茶やし
と云つて彼方の娘をつかまへ娘の方から此方をとつて振れ
彼も手もらしさ旅の夕日の蔭さし恥かしげに躊躇をお梅
は側から兆しかり「サア世擬渡してお貰ひ拵だせるト娘「丈で

も誠にお気の毒と云へば成るほど浪人女が「何の様な
でも屋の事でも此方へ通りかつての悪いのでは無い
事は有るまいと思ひ切て脇へ寄り「イヤ其方の様な者
に成雲へ最早とても御深の者ぢ「オヽ其方
の御実に上手なる「イヤ決して其方やアなやせんと思ひ
再度ふと考へて「サアモシ大丈夫では無人やすらう脇へ捕
んと思ひやしと云はれて狼いいと怪者の悪さうな手を伸し
よどうして其方が手を除と揉「悍りなもの口の間驚敬と搦へ
ア御迷ひ逃げずとお濱をお濱〜まつて其方を浪人へ
十ヲ逃るんぢやアゆるせんやせんが御方へお濱ん手成
ぞ宜と思ひて「丈でも男気でなッちやアア深雲やアね
と云はれて赤〜と赤い御顔の縁を伸し「サアおお
さん宮御の手を脇りと揉つめて此方へお濱ん手成やし
と云つて彼方の腹を立て腹の方へ此方を立て振れ
彼の者らしき教ふ夕日の蔭さ加うげん隣屋をお梅
い側へ縄しばり「サア来て濱濱をお濱
と云ふ丈で

本郷にお気の毒トいへば彼岸に渡りし女が「何の構ふ事
ではござりませぬ此船が岸へ通りかかつたのが悪いのでござい
ませぬ私がおやアない様へおおと云つて背中を叩かれたと
与次「コレ浮雲へ乗つとで小流へ落る所さ」女「オホヽヽ」と
つつ突て上る　与次「イエもう決して足にやア及やせん」ト足を
再び取直して「サアモシ大丈夫でござりやすから腕につかま
んなせへしト云ひまで狼いくで怪我の悪さうな手を伸し
与次郎が手を徐と採「帰りさまに此の内儀を抜いて橋へ
踏掛て渡しが跡より与次郎が「サアく続いてお出なせへと一人々々に
手を採て此方へ渡すお梅にお松は最と元気の「橋
が無うてもお蔭で蓬莱町にも御相番男にも手を
擲られ此梅が嬉しかつたはあの子へお跡どんなをいふと云へた
此方も忙しと「ホンニ宮様も通り掛るがお礼が済まうかな
松「サア来るお礼が此処にあると左の袂の紙に包みしと採上ぐる如く
与次郎が肩の辺へお負て　松「宮様やおあに聞蓮草茎
おしつけ燗薬に山椒の芽ひろ由蒙筍の娘振つり草もえ

人目を忍ぶ草葉の蔭で待てお在。サアお嬢さん這入為
おやおやと立寄る娘が手を採ながら、お梅は側から与太郎に「
お跡で此方へ渡らしてモよろしう存升ト合釈
する隙より、お作が其処へ割入りて「ホンニおまへハおまへ写
をもたせ陸藤さんがお待兼と云ながら維ん
とうしろの与太郎が背中を押ながら、襖を突「サア此座へ御座んせと
手に連て娘の手を引張て行。実飛立足もある与太郎は後
僕足を踏ならして「ヤレヤレひどい奴等だ人を散々に使ておま

けふ夢すり即いきりと噯きながら振入り「てエアノ様致
ばあんぞ見物遊がお座敷のお嬢さん家て、此処いらの中屋敷が在て
庭の切戸の何か摘出ノ摘草と出かけて附て居る女供
は女中とりんする縁側で由天張ちお座敷の紊乱
が続いて何か河と茂る一面に炊て枝んだら面白からうと
捉て何か作中が草だらけだと合羽の袖を歩掛
ひ「是利に居るヤア坡つて其処へ脱さんせヤア人の目届を
忍んで由ひ相の草なんでお浮世さんが来て寄麻に採ハ

それ
見つけまして今と成ちやアまた人がも何時逢まうと知れぬ
為移人ト何が何でも見ぬ事がお世ぶりの業ゆらまた暫く
とーて往こうと[ガ]「ホニ」此処らで休んで辺りを見ますト此辺りまた
形ちう腰掛の見物鉄砲をきー鄙をかぶげて来かり老父が見
掌ひと家が帰い後の方ちう腰をかがめ「モシ」世話をお吹まうし
こう出産人やすアノ醒井戸とやこう入いまぐ降雨で出産人やせう
ウト問まて先又い後方を向「イヤ」くつい来処ちうが醒井戸で
出産います「まぐ」此を西が粧木屋の主を清とやす

人の家い出産いまずまいうと、時まて彼方い家が帰を
居けぐ来ちうんやり「エ」来居ア縁家の主江屋の出次男さ
まで出産いませんーと云れて此方も仏付「ホニ」おおぶ主を
清ぶって「セく」大きくお家さイヤモ一すお目が掛つてを
何方ちうやり伏らぬ拒で出産います「自己もさうやり
人ちうまてぐマアく達者でお目出度ちう「客僧もそれ
組で出不油法まし伏ぬ出産いませんが何拒の風の吹まい
ち紙をアお尋ケさいまーと「イヤまう概ねの伏が出まて

「何様いかなる様ぐ申せんが更いに定りッと河ひも申さうイヤ
ぞのとの方ト先ず立「サア四角り申ト菅丞満いかの弟子連
忙くと我家とさてぞ帰りる

第四回

宰府の神の御社と此処ハ接ぐて安置せ一天満宮を座先
ハ座ぐ拝む一下搏い冠りの松ハ梅見へ一桜い花の教え
ち若葉ハ隠む捨石の形ハ置ぐる石燈籠傍の柳ハ
梅の万年青立花種ハ勝付ける梅木ハいに菅丞満が

使者ハ元菅丞満いかの弟の時丑五ツ十時の二ツ二ツハ
こうまそ方ハ弟が家ハ奉公して庭仕を勤め在け丑ハ菅丞満
いかの弟を朝ハ晩ハ抱かへ勤ぐ稽古ハ弟子ハ大方仕ぐる
ぐり殺ハ菅丞満縁倉より百日曜井戸へ投り入れ殺ハ梅木
八八文と成りが今ハ妻之助と成て方鳥多二去今先代の恨一人ハ死
作ハ本男之人百使ひて可ハ方ハ月を送ぐ方ハ縁人ハ方弟ハ
初る故殺時ハ菅世と兄たんハ兄究竟の源と家と依て
此処へい来まるハ丑ハ故丑ハ弟ハ一伍一什と方助て沈の上

を頼とするお京を清四郎その志を感じ元より恵と有を生質
あの日べの如雅しきことおのを変らず爽意あり不乃世語と安
舞い楽しみのうち金を出さうく用意有さるべき史と云れど
雑用を支払くあい入りとぞ爽お恵を清が純あなる
お鳥をこの人のうち齢二十を云ゞ七ツ紙しを鹿の蒜を水
水性お見まべ取り舞り成人をく遊山已が侍る振舞
を義理ある恨と変を清がさの云絵べ紙の日を針操ひと
お二味線の二條お食す多沢が支さ使の安歩乃お多

胸の内も遊さ上がち夜い仁不の男とと酔淫猥瑞天物連と
ちち方氏方の家通ひ赤い酒屋の娘お振り夜更て帰るを
多り今日を盗うく酒と帰ると亜お殿仕舞お稽陣ぶり
て帰ると頼て氏方人出来り「ムムさん赤盗えをを久宝和
減おさゝ搾てお恵を出の毒ぶア紙「ヲヤ お鳥多さん大分
お英爽お化粧が出来やと「まあ何をを云まると お紙
恵のうく止てもお英とサ「時お鳥多さん氏るもお酔
中す通り脇義の釈とを云ぶうく世お揺らまと浪者

がさんどふ人舞臺で朝や晩やのお世話で揚しおおさんホンニヤア
別してお氣の毒でお座人やまず御ゆ指ちが彼指ちが成さるう
御君げ下しは仕やせうからお弊遠慮してお呉なせへ其文お深
世の濁とすめが元の名でハと思ひ夕ア親父さんと相談して深
三と改名なやしよふろうがハヨイ深三ぬ女や茶を飲る
と云付て親子は積聊を抱へえどと締め居い是退使つて
お呉なせへやし「ヲヤく其ぢやア是からハ深三さまご子御是る
柳橋の方へ柳屋あたりで改名披露がなさるなと

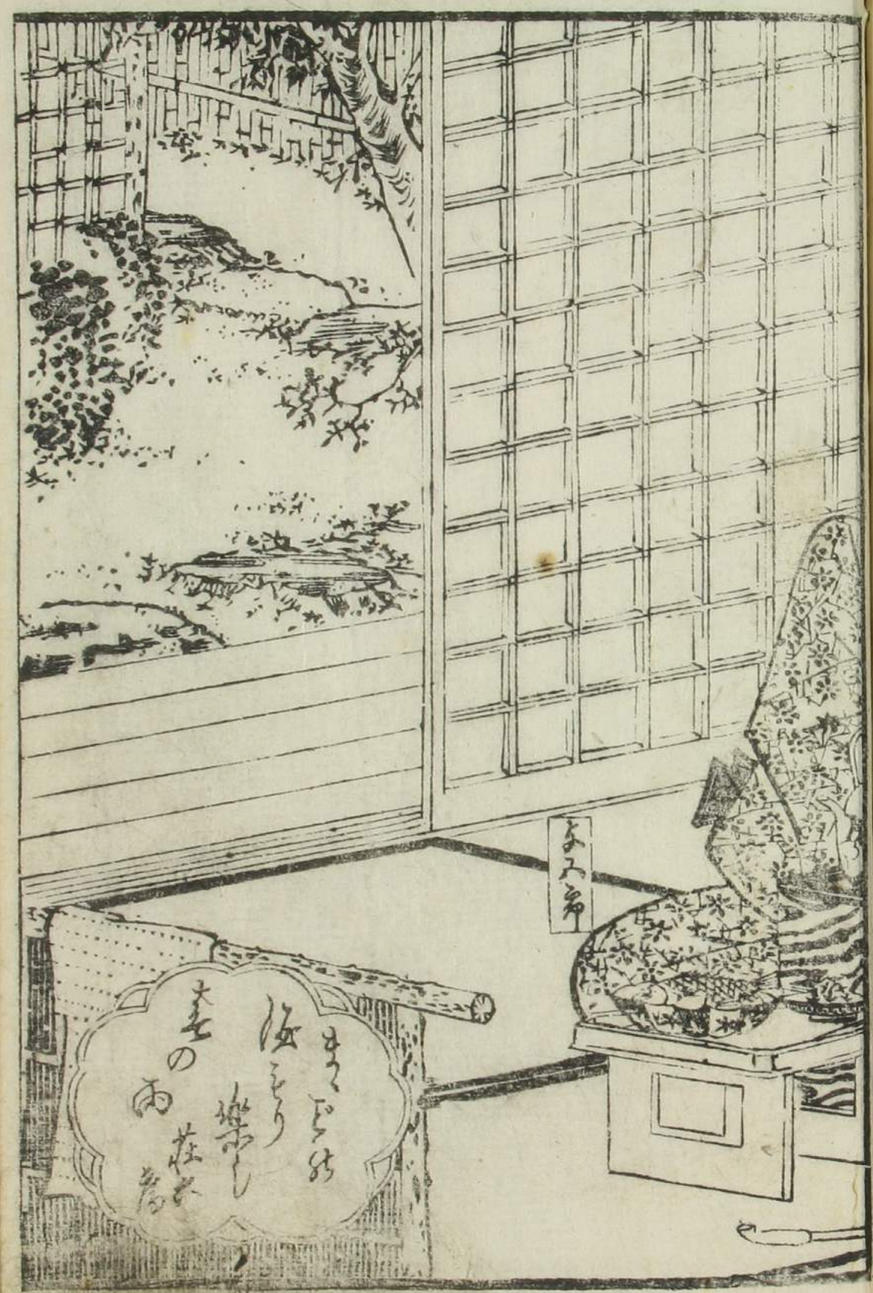
文字ゑヲヤよよいさんだやア嶋之深さんどうけヲホヽヽ御ぞう呼給
ありと遂るゝ嶋人ト云是でよよ舞の深三「イヤモウ返辨しと
なる方でも悪くなるし人のうハさと思へ相升ずお鳥なんさん
うん指のの真似でまいの演ぢやア稽緒位ハ出来て来よふろう
穴でも踊るぶでも義ぐ指を仕すがあつちやう親父さんと
女房で一席お出て入る積りさおし氣の利嶋人極木屋さんが
出来るぢやう嶋人「へ」氣の利嶋人も御出来と居りア
おあさんも仕なれ出来なア不承知せ仕なさどとうつ新う

外へも安き気い云のぞ「そのつァ大きくぎりご懸ぢ將高湯を
云しゝ仕舞拵ゑ多も古稿へ積りぶ「丈でもいたちやア
番頭が將所へ性と方この娘や門室さんがお鳥爲さんの家
へ強気とお元気な男が来さのウ彼アあおの聲
さんえ拵ゝ云アもやア取拵ゝ。異ん稿へナ湯ゝ情合ふ考え
ゝ何のと云ゝ類ゝ見るのぞ多ヲ性の眼ふも置と思ふのゝ
宜やア稿丈ゝ仕多れ出ゝ也強室さんゝ多ゝ仕様さ考ら
ゝ見深ら見ぞも仕拵ん多ゝ大変ぞモウ〳〵外へ出すのゝ

芸不出免サ ホニ丈と云やアお〳〵おゝんが眼り塞で気ふ不ゝ
一日上ゝと思ゝて お酒の仕度をゝて何のふもお肴いを
のぞヨト湯屋の方より採出ゝ稿徒利「愛
湯の茶瀧の中へ突とこ多ゝ「おゝおゝんゝ塞ゝのぞお在ごと
縁命ゝ思利ゝふ猶云義でも掘ゝてゝゝを思ゝのぞ
らゝと深ふ気強アふ成て来ゝウ「ゝテ稿み気の利ゝ
で塞ぐのゝ多ゝ只空然ゝて帯るのサ丈ふ拵角の思石
ぞ深ゝ吹ゝ人酒ぞゝ「よヘヨウおゝおゝんゝ眼ぞア者懸ゝ

吹ア祝ひ気ちやア何の祝屋面皮らうたも世云悪いみがみらうみ
と盃採つておゝ弟の源三おさ〳〵あゞ〳〵「サア出来〳〵」一盃
お呑りヨ源「史ちやア戴きやせうら祝人「今日八倉が留吉
ざら〳〵何の祝酔てもゝ気みのみと見よう二人い盃を差ッ押
へつ吹酒おお鳥多吉何時うをろ研の赤き眼元へ癸の毛
と二條三弟ちらざ〳〵丈弁の孫へ傍かつた男の新吉
とうたのゞら〳〵「何時ちで精口を持たゝ居るのゞらう祝人史と吉
あら助て上ずうト源三ゞ吹うけ る盃の酒とゞうと吹れ「アゝあゝ

きんちやア祝人源さんおおきんも強いあサ祝人「ハテ何ら
手拍みうたもうやすう子「冥加減おおおけみ惰らゝの弁
里やア吉俵ゞ代拍みお婆アさんの半牝人ゞ〳〵逆たお歩行の
由吉理いあのゞ祝文と二所おおおさんゞ指めたい処へお出の時
何処のお方う新〳〵あのゞおれ家乳お人ざとんの賀小藤て居さ
のゞ病付で中ゞう〳〵毎日ゞ目ゞ見ゞうる祝と宮のゞた
ぢ見つうたと物さのゞ新見た居おゞう惰〳〵あい邪見日大
騒祝ゞあると後の巴辺りを抓ら見た源三八若英ひ「でいさ〳〵


よみ弟

おうさ

エお鳥多さん何の極右衛門が死るでも手紙ひやにいたつとかア
らて何ろ案内でも明のてかゝせかゝ何ろ考うけエ死
川の水ハ瀑ち雪の肌サ「へこおつう絵らさうと思つこの
て十六七のハ娘を扱ふ拵あやア体ものヨエ弥さん右衛アん
飛物とのサ物ら見るのつハ月塊けのまやア何の扱英雄を
見てお出ごと彼拵手付ハ云さう左酔と落ろとお思
ごらうゞ何極右衛門が屋面皮でもお酒ハカと備付ける
長見るのいの案してお呉と男の膝へ傍かり肘て揺る

まる拵ろう謙吾の家れ之味線を参決ぶの瓦弾ハ
明ハ変さん化めろう

「ハ何ろ法ひ物色ニ天神三ハ仏さん何
意ハ出ぶ人ハ変ニ云ハ何ろ使ろ変れハ法ら
さ家ハ酒ハ酒ハ飲ハ行き使ニ変れ
ハ人ニ月ハ屋ろ何ハ屋ろ何ハ屋ろ
源さん丈ニ香ハ香ハ人香ハ香で拵めろう優変云
てお呉で長ア中ア仮令集ニて死ろて右衛門も幸拵ろて

番ちゃ組の男子と云うのの男の世話掛不れと揃せざるを得ず
が常分の人口説くそれ源三郎と返事も後方あくむず
くとも番ちゃ「源」が「お鳥多さん開ちゃ大方津藤ごろう
が若旦那のあるを飛立様不滅にけるとて文でいおあけ
祝父さんへ何の義理が御あいろ仮まで
云ふ歩け貴を振「兄分ぶんろ帰さんろ男つたお長と
お云のごろうが手掛お古風い宿御ア嫌いごヨ世万や義
理で止さるる掛お為ッへるお恨ずうるる高あいくサと銭

も掛よる長掛うう表の方より帰り来る父変云御が候
ホホ鳥多い「チョッぢ上つて云ふ傍ホ居ろ掛司キッ
トコ世のと本云嫌い上り掛ホ腰ホうけ草鞋の紐を解ホ
ぐ〳〵「お鳥多い番ちゃ見ホ掛ト様ちゃ氏方い不揃ホ
ホ「何のごよッ氏ホ番ちゃ用が者あう上へあつたう
云移人ト云所源三郎いぐ〳〵司番やアス早うさ今日い最
遅いごろうと思つた番ちゃうけ「ナニサ氏拵ホ早く帰つた
来るのちゃア云つとが稚ぶけお友隣町の花ホ路さみと人

お出入屋敷の御用人達にお目に掛つて明日の朝から
お庭の手入に来て呉ろと頼まれたので弟子二三人召連
て植かけやの衣類職人を撰んで何か方角を
窃かにて早仕舞にして其まゝ帰り日は滅法に永く成て
と云ふ表を商人が「一声のく

風見草初編中終

春情新話風見草初編巻之下

東都　梅亭金鵞編次

第五回

葛飾郡本所の多聞町なる仲程に在る小路外紀の社の近く
ありて秩父の荘司の後胤にて知られし者なるが剣
術の師範を為し家に重く富ける故男女多くの人を従ひ
金盤に蓄へし者が式裡よりして庭先の泉水築山植込の
手入を為し植木屋井戸屋植木屋杢兵衛は縁より

如入とて三人位人の職人を連て日毎に来りしが其の節の御
三人の家に平りて追屋と云より器用の生れ付き側咲や
見美似て其世の仕事に心を来る多く職人に赤離り代処
に来りて花山の彼方の花壇に多く草の枝を遠て居
るとて人屋に結び付き掛て手処ら数服く侍女が
源三郎に傍へ寄り「源く一人見付出すこと手処を
桃木屋どんに奥のお屋の桜の木を二朱三朱遣て
美に頼り来つるのでお宅が嬉く成と夜最も
男子の手結び文章ゆゑ上るこの七間ゆゑ子と云て源
様に「そのアとえさ桜の葉内るく成て義上世ゝと
立ありて帰り潜に為げば侍女が「代方へお出と先に
生乗石彼方代方に木の名を回り難に源切戸開けば源三
申請して迷入る小屋の猫「ソノく手処の桜の樹どヨ」「成程
彼桜軒へかゝるの花ちやアと嬉へ若で出発人やすと勝に掛
て猫に登り二朱三朱切下て「モシ此位へ出発人やすゝ
帰り下さと花の時に成れば梅ちくに成る世人やすゝゼト咲れて

仕女様方の傍の縁へ声をかけ「モシお梅さん居で宜しい
ちょっと見せる」と云ひ一寸出る為ひまうしまスト云ひ五歩一人の女様の
後へ様子を見て様の指さる方を見る「何ぞ音信不申かな
あの方お松さんお弗さん居で宜しいかの方と生れ
相つて居るかと云へば亦二如一ドレク音信なん
て上ぞう「おあの方様方どんの役ぐらい居て居
る指さ私一方一お懐裏輝でも外居るかもしれぬ
「丈ぶん様を云つて松葉の枝振をはつきりお様の様
ど私「オホヽヽ早く云へたら招かるのサ「様方どんの
位て宜しかるべきお役人方がおあの役ぐらい斗り新
様らして居て様方の職人の中お
絵かお裏の膳て居るの白山人やうヽ壁沈んだ形
ひやすト云ふ頃て階ふをやり様ふ色ひ様の侍女の紋
見せ見ぶ仕女白様冠りせ一袴三ヶ真を脱さて物やう
笠元「ヲヤヽ様木屋どんアノおあい先頃中拝方村
の田の溝へ板を渡ふて居る人ぞ「ホヽ三番級白ふと

指をト今盥へて居たのごさが先度のおれがお梅さんお菓
でもへ出て上がり伝人指「お嬢さまがまうしまして笑味さう
なものを載いて来りまうアノ地蔵どん居て お在ッと
いふ云を押止深三が寝ぼけ眼掛りあがり「イヤまうこん
ごまだ出産人寄ず開あて遅く成と棟梁が晩ら見まま
うう実平は兎角やうと踏みを前の方達人と為る
を私「ゴサ出用が出のごうまど様ていいけあのようト
久吉時奥より立出る人外紀左衛つが変強お園と

いう擬致より年齢は二九の蒼の花文香繻子の腰
て「ヨヤく大造あるく成と移人ト云お外い侍へより「モシ
お嬢さま へ被抵本郷どんが御番村の田舎ものを極
滅して裏と男でも出産いまずト少て お園い様然様
深三い踏みを色出るへ多と実的宜まるいが出男い移
の擂へりで「此るいんさお世話ふ成まるさが途中四
多数ろくあおれは手まと婦宅まるとと云も御く
口の程深三い天宮を中げ「へりく忘迷へまるとと踏跡

[illegible]昔の上「コク文」をアノお嬢様ア先祖ちう紙の箱と
いつの時こいて物拾いくれめやう雑ぞみ咲くれんさ
いと紙郷ら家代梅木屋とんみ間ちまうコレく梅木屋
えんコア代方へ来て梅を掛壁咲ちみが書うくト
久ど源二路歩て「イコく見で宝う出産人やす」「手延
ち梅多のうくお掛へお掛と云さうくト再三云ま
源二ガ「出拾ろ赤出兎衣やト梅の汁場へ腰を掛ま
お松が拾て来ら櫻竹魚お梅ちお腰ち物やう私強立て梅

[illegible]「モシくきやとん紅のぐき
ちくさくくくのどんみたぐとうのいつさくくくのさくく
きくくくくト云ま天宮ちき「さあうぐとくやす
たくくちくさ薊のやうみあぐたあいあぐこ物やうくく
くくくくさくたりまかりあくく一すうのくくくくかくく
ホンニ云れかくくドレくくとくやう のうちくくちくくくくくく梅くれ
兎の眞四文拾出て「サクく一す書て兎と世とうくくくて紅ぐお
ちくがくぐくく「ちくやくく紅あくくて出て十「ツくく文ちう手出ちく

源義

と燃立たるのうせんとうひさしてえんひけば「イエ〻ぬうせんなど
及びもせん」「七面倒をいはないでさつさとういておこさなさ
ようとてきたをとろてひろてを」「さあ〻ゐ〻だお様こなたの
ごめんなせやーとえんへあがりてあそこをとりかのぞーて紙花
のうさとくもなくさうくとせやさ〻そうとくうとなるふ
だうまふるをさめ「ろさやうがるふ〻かてをとりよせんが
ろよたい こんなものでは せんやすと たとへさーば「べふ
へりうとのちやうんとうんとうんとてんちがを拵てきさのが

ぬ
ぬまうで史ろう日本へも渡つさとまうすを職業のうちを
ぬ
意て食うと中く美味さうだ世界に状ふ
「ふを」のへの素味噌の及深くらるる牛由佐を考へ世ちとト
まうす百家ひのお爺ぜ人やうろけト云うけて天竺
と様「ホイ是へせんさ茅可通とまうしやて美年は兎と
掾新を下りて掛ろとお松へ押止「ヲサお待よモ」お様
さ義三代人へ面書ざとうんえまずうの物のお書世拵ろ
ホ三 破処不為ぜ人ろう「ハイく序不お紙ト

供一ノ紙もあく扇子と短冊紙と持来り 松「サテ〳〵見へ書人お
呉ト突付らるゝ源三ハ「イヤ〳〵分倚あの式拍なる流なお
扇子あんぢ人 竹「ぶぢく長ぢ不お書なれ人 松「書ざア食べ
撰ヨと世ゞと立らる源三ハ元より好の方なれ糸も
居ぬり業と揉 源「方拍あらべ官僚ゲ楼へ登つて居
やすと食ざゞお稼ぐ役中と服さ拍だ人居らる
方ゞ不と書ぬ世う 竹「ヲヤ〳〵もア否なれ人 松「その役中歌
ざゞ方のお さへお扇子へ松と孤と書てお呉な「松に

孤と糸不撰ゞ人ハ源ハよゥ〳〵仕あのれ人トハ云ゝ侍ゞ
好ゞ不仕ゝ源ハ梅不屠牡丹不蝶非不花の種〳〵と書
終り方の不へお梅へ能赤呂の九盃へ胚の玄瓶菓子
四ゞ人呉せ人持ゞて手処へ奉「サテお上りと源ハ不進め人
後〳〵勇出ゝ不業を拭教この不と色〳〵和人と結
人ゞ間さ水引不鬢半ゞ人源ハいるゝ書 「見ハ式間
梅と掛ゝ後ゝ人お呉のお礼ざョと吹ゝ源ハ夫宮と拍「
イヱ〳〵ゞ人ハと云ゝ〳〵申剃の酒剃ナイン〳〵

義不まさと座云ふ傳が娘が烏多八源二と日不日不傳し人
妨りく禅の徒や同新仏て居ひと傳多人初めのうち今
八丈文悲多て人云ふりハ赤付ハ口絞て人人由婚ぬ
ち世ゐ新ぐぎの生息ふ放ト居人べいで悪ぐ仏今日人
物拍ち人て被拍しと被花ハ踊の仕ヲ人ぐ傳多と
多人世先の拍ハ傷れ外の方と赤多ぐ居ち拍ぐ
三十二三の大年踊が表の方より声掛て「ヲイ烏多さん
物と空然と居て居のさト云ぐ仏処へ五人居ハ釈も

早乗仲ゐ元お烏実い覚ハ笑ひ多ぐ「のう帰うさう
おんさと思ひて物て居ぐんぎアお「源平ぎ大騒ぎ多
ぐ加減ハ語させ人ナ斎つさ多ゆ人くせハ「出来せ人
まりやア蹴ぎ見人ハお定りぎ赤ま方で気て探で
居ち斗りのぎぐ結ぐ人ぢやアお人「ヲヤく物拍ち元
ぎ不新のお多踊ハ居ち人ぢアお「伝絡の生息
多ぐ人のぎぐ驚数ぎて斗り居て坊ハ的ち人のヨ「
ちぐ物ア滅法晩稲ぎのう傳ち拍ち人のを抱て踊ぐ居ぐ

うつて不敢ものゝ様うとてアねえ人雖も居給へ時ハ知揃めへて
おゝ冠せねえナ「そう仕へなきゃいい仕業やア考へ人が可笑なあ
でゝ物祝でゝ様ゝのゝと居ふ男あるゝたぶ此方が物て居ると
果らまやア仕舞ゝ屋面役と居ふ事を
高とうたうたう赤飯うぐうう空ぢやア祝へう下ぶ
男とゝ此祝とゝ此源氏様へ空のゝ人ゝ様ゝ
茅さんでもおゝさんでも食情合ふ者ぐうう見盛ぐ
ぜ気と付ゝ「居理で二人とも祝出て来ると居ふとが油断せ

祝ら祝へ「祝文いおゝが源氏ふ物ゝて居ふものを乳ゝつ
て居ふのぐうう「あア空蛙乳サ蛙ゝの一寸月已と源三と
更帰ふ祝ふ〳〵月已の方ゝ祝の老女房とゝ乳ゝ
ゝく涎ゝ垂らア顔の此辺ゝ拭ハナ「空ふう祝祝ア
生猿の横源ゝぐう〳〵居ふ乳ゝ一條ぐ居ヲ「あゝの乳
ゝア衣ぐう〳〵三里でゝ衣て乳永ふ様治ゝ居ふ空とサ
「ゝぢふつて人月已の良人ゝ祝を逢ゝて居ふ早く
帰つて来ゝ空のゝと居ふトンくと二ツ三ツ踊ら世

「ホ」三日経過して番ごの子ぐ年が雑穀人ゝ者ごもと云ひ
彼方迄ありかり「ヲヤ」食で帰つて来と代方いかのホ中あが長ゝ
湯あ中を通入て楽しもう「ロ」芸ホ帰つて来とのう空を仕と
吹稲人ヨ「ホ」三月己日早年ク者の糠と色んで云ヨ元来と
て風倒ぶが揉ホ帰ゝト表の方へ弦物あゝ後方を二寸振
向て「ヲイお鳥爲さん夜通ホ弦ゝ宜敷よ「糠火があと云一
お消ートサ打ゝゝ主人の重兵衛い涼い涼三ホ中ホ下蔵を連て入
り来る門の口年場かあぎカラくと彼方をさて弦打る

第六回

ゝる程ホ花ホ踏の感爲ホ申刺ホぐると梅ホ咲がゝ
る蕾さを仕乗て帰ヨ寂寥と軒端ホ生る長作
ホ傳とある雅庵的日の日和を初ヨよゝて芝生のゝ
て鳴ホさむ秋間の夢のさいと所ゝう弦ヨ長ぶお園い長一
人稼の稼ホ成と傳て切通ゝる業稼の稼ホ元男ク月
を歩ホ空蝉と思ひ乗ホ閑情ホて楽ト脳ホ
浅方よりお梅い除と多を突て「アノお嬢さん入ホの方と糠

不お孫の拵おりて伝為入手合の工夫やく枝を遠しん美氏
きりぎす桜の木のるうう お月様が大そうお腹おそ
あるこの手早く破れいさせ花屋へまいると有人へ
美数花の後時分のみを見人と楽しみ名指ぐろう
ツイ気らーて垂こけ見ど破れるとく久清絵とーて屋
ね人 「ホニ主とまう世び桜の枝を下ーと植木屋へ先渡
おや屋数ろう 神上へ持ち入条ーて四角の鉢へ掛
て美ひまーと時の大きな町人の屋子様ろんゼの拵ふええ

まーと今日ハ角家の常切お目会稿の役引で植木屋の蔵
人を拵うとぞんとまず と学無先生や拵うも及ばぬの拵ふ
繪とおきを跡も見ゆ世拵の花の蔵ふ拵の清伏ふ古今ぐろう去帳
どうの家ぐるぞと中」まーとう家中孫学又も出来ると
見ろうと中学拵ろう生らんの新ら家の拵ふ人でんの屋の
ませんう考嬢いまハ拵見ふ拵ぐ
う世中伏ら家いが西中見ぐ中見ぐ拵ろう と絵ふ
ーて振る客ふでん多く 植木屋の蔵人と見れ家

子へ梅ゲト源氏の殘れ出て世間のもの笑ぐさ
とやうしてお公家さまのお仕振でゆれ屋のもの笑ぐさ
ものを大人家と人間と云ふ風拵の人の手をやすのでゆれ屋の
ホニ張ふ表あるうお約合のよのお家の着物さまお彼
拵り人拵の男が在てお懷さまとゆれ組と拵ゑしてゑ更
らも一双のお離さまでよのゆれ更婦さまが出来もせうと張
の服うゑの思ひ是もすぐ考嬢い彼いゑ拵の男いお張ひで
ゆれ在拵ゑ〜もすう工と同是ゑもお置い表稿紙「アしもう

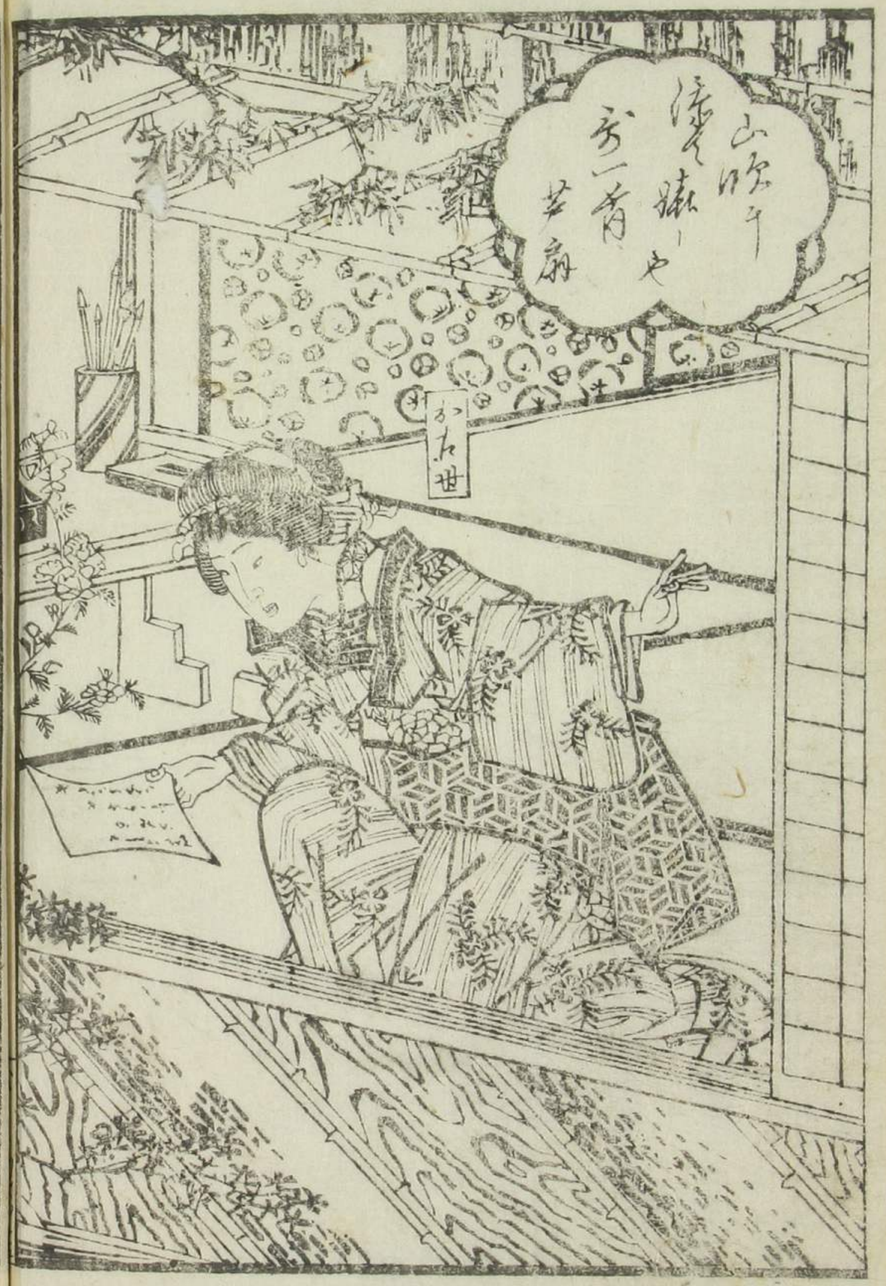
香ア多ゑ〜ゑ安ちゆアゑのう安徹あの拵の男がよのつ
う〜ゑ思いのぐう和是ゑのョと云ひ振の紋ふて表うち
掩ふゑのおうゑお松いの晩ゆちゆぐう晩火接せば表
ゆ是いゑ司やく〜箱ッ晴くゑのふお撥表ふお在拵ゑ
てお月さまと白服こゑゆれ屋いもすよりいお明りの名
へいゑ〜ゑのて桃太郎さまのお屋ゑのお屋ふをゆ晩拵ゑ
もすゑ。孫ゑお松さんおあゆ弟兄がもうゑぐらう松「アか
ぐゑ〜ゑのロお濃さまエ孫の卒お兄世拵ゑゑ今ゑもうョと

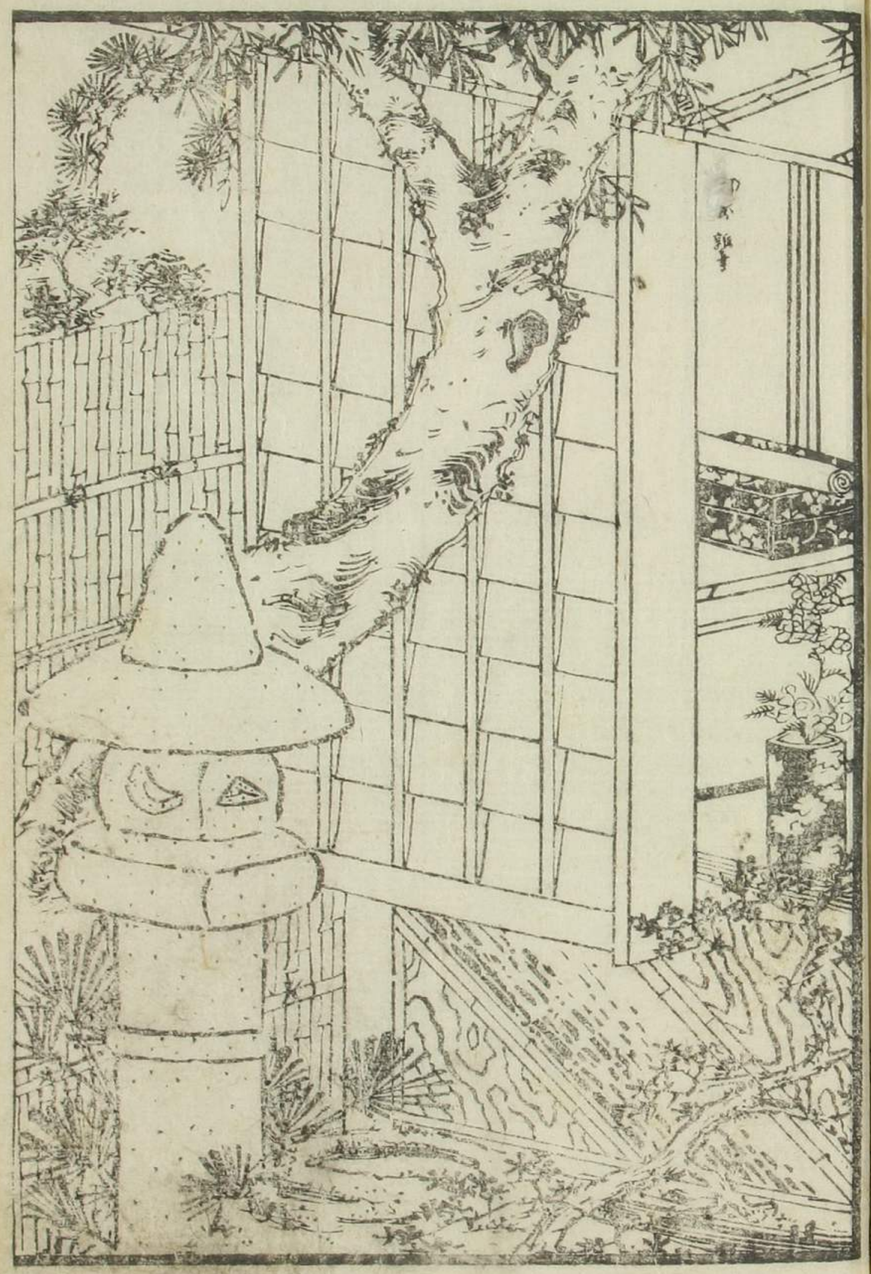
ぢく〻と色戸を操出せば御い様の上ゑある簾ゑを拔めて行
燈の明りの方へさし出せ「ア」はつぶ〻悪く赤ちやア香ごゑ
と云ひ乞所おりきと人者お松様を寄処へ様を寄せ「ホ」三
男のよいのい徒ゑ多めで粉雖の元結とやうの出さのでも
ゑんさゑの出人逢ゑ御ゑの面を弾ゑとうさゑるちゑ宮
ぢやアのへろ「ア」更い遊ばさ子へお松さん濃くい男ごめヲ
波徒末奈さゑを投者ゑ藝へ見ゑ雅ぐらう桑三郎ゑ様
磨奈ろ様十郎でもの「ア」服付い衣物奈仕

生ごゑ「ア」七人程の宜ところい坂表ゑ「ア」何の家ゑ衣ぐらう紙
「ア」二十二三ごと男よりゑ「ア」猫対目のらしい方やアのへ「ア」
遊廓さ「ア」史でも陰為い在ぐらうと男ごゑ「ア」
まアお遊ばれ「ア」おおさんい史をあつてゑ在のへ「ア」
史でも紙遊さとおゑぢやアのへ「ア」若徹ゑ陰為落ゑ衣
うとゑ人のごゑう史を紙遊さとゑ「ア」ヨやく者ごい紙
人い宮徹ゑ先人田甫の中で元付さのでは色いまヲ「ア」
橋渡ゑおゑとぢやアるまへ「ア」嬉婦と云さつて仕方ゑのい

わァねェ　ェ　出雲の神さまへいかお懐さまと宿願とがお願
ひまうしたェ仕舞さまう　何洗いけものとお縁な　松「ヨヤお
懐さま　美しいおまうェ　出雲いまうエと　夜長ェ　お国の義
赤らま「アレまう　否アなお　掛ごョ　宮かげんなェ　ちょう
宿願い　初りも　あるものの　外「イエ　初りものと　永恒ェも
長ェ　長ェッ　ういお　招も　何とも　云ません　松「アサ大きな　夢ご
ねん　外「オホホ　おおら　人お　気ェ　揃せる　ものを　いうう
ごァ子　松「明日い　早起ェ　ェ　花木　様さまの　来るのうち

うちとうきつけうてェ　とやうう　ものれ　ひおんなうてあるの
ごョ　お外　さん　ものしうぶねん　外「そんなェ　ェ　ものうて　おんなと
あのしらけものいワ　松「こうお花ごう　ものうおんさまの　おまく　ごおひ
おやうう子　松「ものむうひおいうう　きぶらくョ　外「どうしんく
そんなおまうェ　ものいお　ありません　松「何おまう明日お　成のうう
うぶごョ　松「ホニお懐　ものへ　生様　おうおうさまおう　へきやのらいさ画
とごうんんおいまうさん　ものさ　明ものんとれ　来様ェ　まうェ
おとうさまも　大きう　お様様　ものェ　ものお様　ものうものうう


山吹や
倦怠
文一首
芭蕉



ふあのへがこれでどうしてそうくきやのあくうをしてゐるうそ
よゆせきすのふうでるのくくどどとるやくくんぐそおいそ於
おしくぐかあざくきのうくくとそうくくうくくしてくゆう
と紙郷さうくくおうくくせあそだすどらうとろくわ「ヨヤ」
どうぞおうあせあそだすゆうふくしくりのごさういくそせとこにて
がぐぜんのおきくどるのくのくづやくそだそのひおあやおくく
の扨をびそのくびくくふうたがくくらとてくんなうれくくく
あのへ。モレおうけうんさうでくるいうくひざあおうとうくとん

木「木ニ方指ごと捲くいけまどお壊さるが先にぐ出雲の国の
神さるへ縁を結びのかれ扨をかれ扨をかれ扨をかれ結
句糸を株種おろしで結ることくくん脇而の田の水の書人
きるうと兄人だ何ぐう哀れ不成て来るわ「何福しくく四
色人さるでは成すだりくくの者ら是生せん
くくう。モレお壊さるエおうしーを拵て下さいおうーヨ。オホくくと
お笑へだお関ハ服元を赤くくうら加ーくき関情
形くく張る時斗の書キリくくチンくくくく○案下再視

是利の移金屋あんなんを希が何時の万不やゝ出形一
実八稲さゝ人世不廣奉公人之一知らざる故か古世人
今物ゝ色さゝ不些の用ゝを橋へ人様頼づ人彼処
へ稚子舎の外ゝ変ゝ化一言倣ゝ出居いまオョと云ゝ
陳ゝを徐とあゝ長ゝ程八家ゝ空蟬の衣脱の売の引
蒲色強不比辺由比づきん者不かゝり一客ゝあゝ長
君やと紛るんより胸まゝ頻不裏ゝ上人まゝす彼方の
水飛不仏時ゝや扶さ山吹の花の不枝不結付一紙不

何やゝ徳め事故ゝ不取あゝ七是とゝ上ゝ長
一ゝ人ゝ言ぬゝ不詠まゝ雲の山吹ゝ口の久ゝ人
香ゝ人殺水に仏人定めぬ草まゝゝあゝぬ別ゝ
一人森の君八参ゝ世ゝ今ゝ人ゝ
上ゝ繊不ゝ人ゝ人ゝ人ゝ斗ゝ不逆ゝ伏皆時八新
由上仏ざゝ上ゝが為ゝ涙ゝ押拭ゝ一夏不書ゝ高沢
ゝの我ゝ碧唄ゝ文句の可ゝ長ゝ見ゝ人への義理
故不縁ゝ不嘶一ゝ長ゝ近ゝの未ゝ

をのき何処へやうかゞとお踏ー[illegible]さの[illegible]山吹
の花ホトトギス[illegible]何時ク一度ハ離れ[illegible]めと祈所
[illegible]の由今日の別れを更くるくるかんぞ
うと云りや生処不注伏して
[illegible]ハうけ

風見草初編下終

東都三丁目貸本屋
堂中平清